



内包するもの  
inclusion  
陶 2000×900×1650mm 2個組 2024年

はじめに

本研究は、陶造形において様々な作り方がある中で、その手法を選択し作り手がどのような造形思考に繋げているのかを考察したものである。

筆者はこれまで、陶素材で手びねり技法を用いて作品を制作してきた。その手法を用いて内部に空洞を持ちそれを包むかのようなふくらみを持つカタチ<sup>1</sup>を制作しており、その形を作り続ける意味やその技法を用いることの必要性とは何かという疑問からこの論文を執筆することに至った。

まず、筆者のいうふくらみを持つカタチとはどのようなものであるかについて自然物や人工物の形の構造から論考した。それらの形の比較を基に筆者のいうふくらみを持つカタチについての認識を明らかにした。

次に、そのふくらみを持つカタチを陶素材で造形することとはどのようなことであるかを論じた。陶という素材は、粘土を自在に変形させて形を立ち上げ造形していくことが可能である。その際にどのような要素があるのかについて外館和子氏の論述を基に陶造形における特徴を明らかにしていった。そして、そこから他の作家は、どのような思考で造形を行っているのかについて考察し、筆者自身の作品を基に陶でふくらみを持つカタチを造形することについて再認識することと表現の可能性の一端を示すことが出来ると考え述べた。

## 第1章

ふくらみを持つカタチとはどのような形であるのかをまずは自然物と人工物からみられる形の構造を用いて論考した。

自然物の中でも内側に内部（細胞）を持ち合わせているものと巻貝のように内部が存在しないものに分類した。人工物では建築物を挙げ、その中でも空気を利用しふくらみを作る構造と柱などを使いふくらみを作る構造とに分類を行い、それぞれの比較を基に筆者のいうふくらみを持つカタチについての認識を明らかにした。

## 第2章

陶造形におけるふくらみを持つカタチをつくるとは一体どのようなことなのかについて

明らかにすることと、陶でつくる作り方の一つである手びねりについて説明を行った。

陶造形においてふくらみを持つカタチをつくることとはどういうことなのかについて外館和子氏の論述から“側”という立体を立ち上げていく特徴や彫刻の塑像と陶芸では構造的に芯を持つ塑造の形の成り立ちと陶芸の土（粘土）そのものを構造とする形の成り立ちに違いがあらわれるということが明らかとなった。外館氏は「内部の重要なものを作家は“側”でつくり、受け手は“側”を通して内部のそれを見いだそうとする。陶の作品を鑑賞する際には、しばしばそのような作家と受け手の精神的な交感がある。」<sup>2</sup>と述べている。陶素材でふくらみを持つカタチをつくることは、“側”を立ち上げることによって起こる内部に空洞を持ち合わせる形や、内部を包み込むといった形であり、それは陶造形の特徴の一つとして欠かせないものなのであるという考えに至った。

## 第3章

主に手びねり技法での制作を行っている作家である中井川由季と中島晴美の2名を取り上げて論考した。手びねり技法を用いて、どのように素材と向き合い続けているのか、またどのように形作りを思考し作品を制作しているのかについて提示した。それらから、手びねり技法を扱うことで起きる造形の可能性と作家の自己表現について考察した。結果、その手法を選択してきたからこそその思考と制作過程から、導き出される形が作家独自の陶による造形となりうるという結論に至った。

## 第4章 修了研究報告書

筆者の修了作品『内包するもの』について、筆者のふくらみを持つカタチの意識とはどのようなことであったのか、形を制作するときにどのような思考で制作し、それがどのような意味を持ち合わせていたのかについて、これまでの作品を振り返るとともに、修了制作に至るまでを記述した。これらは、改めて手びねり技法を用いて制作することの意味について再認識することができ、筆者が手びねり技法を用いてふくらみを持つ造形を制作することで重要視することは、粘土を指で挟んだ

ときの粘土表面の内側と外側から内圧と外圧をかけることによって生まれる造形であり、陶による造形の独自性であると結論付けた。

おわりに

本研究は、陶造形において様々な作り方がある中で、手びねり技法を用いて造形することや、筆者が関心を寄せているふくらみのあるカタチを造形することについて明らかにした。それらから、造形することについての再認識と表現の可能性を探った。

第1章で述べた自然物と人工物の形からその形が持つ意味や効果について調査した結果、その物質が意図して作られるかどうかの違いが重要な要素であるのではないかと考えられた。また、その中でも自然の内部に細胞を持つ形は、外部からの影響によって形を変えることが可能であり、それによって生まれたカタチが筆者のいうふくらみを持つカタチであるのではないかという結論に至った。それを踏まえ陶でふくらみを持つカタチを作るということについて、まず陶造形についての特徴や実際に手びねりを用いて制作を行っている作家の思考や言葉、作品に取り組む姿勢を明らかにし、筆者の制作から改めて作品の独自性や表現の可能性について探っていった。以上から、筆者が思うふくらみを持つカタチとは、意図されず作られた形や環境に左右されて作られる形であったのではないだろうか。また、それを陶で作るということは、ひも状にした粘土を指で慣らしていく際の粘土の内側と外側への力加減（圧力のバランス）や、形を出したり引っ込めたりしていくという側を立ちあげていくことによって生まれる意識から来ており、手びねり技法を用いたからこそその形が筆者自身が求めるふくらみを持つカタチなのだという結論に至った。今後制作していく中で、陶という素材や粘土とのやり取りで生まれる造形思考や表現が、新たに作品を作る可能性を広げるものであると考えられる。

<sup>1</sup> 以降、本論文中でカタチと示す場合は、筆者が気がかりなカタチ、特に制作やカタチを分析する際に使用する。その他一般的な形を示す際はカタチ、形と表記する。  
<sup>2</sup> 茨城県陶芸の現在―陶の魅力と可能性を求めて― 2000年 中泉多詔、外館和 P.14